

下澤洋一先生の人と学問

高木 泰典
久保田 茂隆

「下澤教授の思い出—高木」

下澤教授は昭和13年4月23日、長野県飯田で出生され、地元の高校を卒業後、明治大学の9月の特待生試験に合格し、上京した。下澤教授は、文化系にも関わらず数学が得意で、その秀才の誉れが高かった。

下澤教授と私との出会いは、大学院の学生の時であった。知り合ったのは、和泉校舎の学部の試験監督のアルバイトの時であった。日当と食事付きということで、当時、試験監督をする大学院生も多かった様な気がする。私はたった一回だけであったが、偶然に下澤教授とお会いし、親しくなった。下澤教授の出身が長野県であり、私が戦時中、長野に疎開していた事もあって、急に親交を深めた。長野は私にとって第2の故郷であったからである。知り会ってから、よく神田の町をぶらぶらしたものである。二人ともブレザーで、坂上から下って行くと若い女の子にすれ違いざま、「あの人いいね。」とひそかな声が聞かれた。二人とも「高木さんのこと知っているよ。」「下澤さんのこと知っているよ。」と言いあったことも、今思うとついでこの間の様な気がする。法学書院の商学シリーズも下澤教授に一部手伝ってもらい一週間か二週間に一度位、新宿の「滝澤」で編集の人と会合をし、それなり、忙しい毎日であったがそれも親交の場でもあった。

下澤教授と私とは、2つ違いであったが、なぜか、気の合う仲であった。もちろん下澤教授の専攻は交通論、私は会計学であり、学問の領域は違っていた。しかし、下澤教授の勧めで大学院の交通論の講義をとるようになったことも、一層二人の仲

を近づけたような気がする。会計の評価は原価であるというのが当時の風潮であったが、そのきっかけは、ドイツでは鉄道業、日本では海運業であった事を私は知っていたので、それなりの興味がなかった訳ではなかった。しかし、下澤教授は、大学院を出たあとの就職のことを私に心配して、この交通論の単位をとるように勧めたのである。それは、佐々木吉郎教授、麻生平八郎教授は明大のボスの存在であり、大学設置基準委員会の委員長（佐々木吉郎教授）でもあったからである。そうこうするうちに、下澤教授は、大学院在籍中から芝浦工業大学の助手になり、私は大学院博士課程修了後、高千穂商科大学に奉職した。麻生平八郎教授のご紹介で、山縣記念財団海事交通研究所にも奉職し、ここでも下澤教授と私は出会った。ここでの仕事は、殆どが英字新聞の翻訳であった。下澤教授は交通論であったので、苦労はなかったが私には交通関係、特に海運会社の荷物の輸送量の予測は苦手であった。そうこうするうちに、私は幸い海運集会所の雑誌「海運」に海運会計の原稿を書くことを勧められた。今でも、海運会計の文献に私の名が残っているのはその時の苦労があったためであるが、若かった私には、その仕事があったことが、救いでもあった。山縣記念財団を設立したのは、山下新日本汽船会長、興亜火災社長の山縣勝見氏である。山縣先生は国務大臣や経団連の外交委員長なども務めたこともあり、また、日本有数の資産家であった。この研究所は日本橋の橋のすぐ近くに今もあるスルガ銀行ビルの9階にあった。そのため、昼食は三越食堂や紅花などによく出掛けた。下澤教授は、とにかく電話魔で、会っている時、2～3回は、席を立ち、電話をまめにしていた。

ある日のこと、遅れて研究所に入って来た、下澤教授が、この人と結婚することになったと相手の写真を見せ、にこりと笑った顔は今でも忘れられない。また思い出といえば、当時は学生運動が激しい時であったが、下澤教授は童顔であったためか、芝浦工業大学に行っても学生と間違えられ、ゲートはフリーであったと聞いていた。その童顔の顔がほころぶと人の良さが、良く伝わってきた。

下澤教授が家を購入し、長男が誕生して間もなくお宅に伺わせていただいた。帰りに駅まで長男をダッコして見送ってくれた若き頃の下澤教授の姿は、今も時たま、思い出す。

その後、2人は、この研究所を退職したが、2人はまた、工学院で再会する一方、

千葉商科大学でも再会することになる。2人はどこに行っても道はつながり、再会する運命であったようである。下澤教授が亡くなられた時、その祭壇で、私は涙を抑えることができず奥様の前で泣いてしまった。葬儀で涙をしたのはこれがはじめてである。心より冥福をお祈り申し上げます。

下澤教授の学問のレパートリーは交通論のみならずコンピュータなど多方面にわたっている。学問は人柄通り、渋いが数学の出来る強みで其の研究手法は鋭い物がある。千葉商科大学に勤務すると研究テーマは通勤立地の交通面からの分析に終始された。博士の学位論文も、従って、通勤立地の問題であった。首都圏のうち、特に東京を中心とした住宅立地と通勤交通に関する計量的研究である。家計の最適立地を考察し、立地費用の最小化、効用極大化および均衡立地について分析している。特に下澤教授の論文では、東京を二核都市として捉え通勤パターンに関する分析から、重力モデルの適用には問題があり、機会モデルの採用が正しいという結論を導き出している。また、論文では交通流動の制御という観点から交通結節点の問題をも論じている。

「下澤教授と私—久保田」

下澤教授との出会いは1966年の4月に私が富士通ファコム(株)に入社した時からである。当時、先生は明治大学大学院の博士課程に在籍しながら9月まで会社に勤務されていた。余り、人付き合いは好きではない様子であった。しかし、私が明治大学の平木龍雄先生と親しい間柄で有った事や、近代経済学を学んでいた事などもあり、更に、信州飯田のご出身で旧姓は久保田で有った事などが縁となり、良き師・良き友として、兄弟のように38年間の長期に渡りご指導・ご交誼をいただいた。多分、先生は非常に寂しがりやで有ったようで、それが誰に対しても相手を傷付けない心配りに結びついたと感じられる。

計量モデルの数式が解けない時に一緒に考え、ご助言をいただいた。肥料配合設計モデルの数式を考案し、この数式を使用して肥料配合システムを作成した。業界紙に紹介され好評を得、情報科学研究所の存在を情報業界に知らしめる事が出来たのも先生のお力添えの賜物である。私が著書や論文を執筆した際には必ず先生が訂

正を入れてくれた。原稿を書き終えて、編集長と居酒屋で一杯の盃を交わした後、編集長に二次会に誘われても、先生が私の手を引いて拒まれ、帰宅をせざる負えなかった思い出も度々あった。専門学校経営の立て直しを行っていた頃に、本学の高木泰典教授を初め、多数の専門分野の先生方を紹介して下さり助けていただいた。

専門学校の若い先生方と旅行に行くのがとても楽しくて堪らない様子であった。川や海へ2人で釣りに行くと大きなバケツに数匹の小魚が入っているだけで有ったが、釣れようが釣れ無かろうが、先生にはどうでも良いことで有った様である。大宮の団地に住まわれていた頃、団地内をブラブラしている先生を見て、団地の住人が先生に「貴方は、未だ若いから働いた方がよい。良い仕事を紹介してあげるから」と云われてビックリしたと話された事もある。1977年に明治大学より商学博士の学位を受けた時、記念の万年筆をお贈りした。大変に喜んでもらい、20年近く使用の後、痛んできたので「捨てたら」と言ったが思い出だからと言われ大事にしまわれた事を思い出す。先生の人柄を表す1エピソードである。

学問に関してはご自身に対しても、私に対しても厳しい指摘をされたが、その他の事は余り頓着されない先生であった。結婚される前の下澤夫人を紹介された時は、いきなり「会って欲しい女性がいる」と云われ、正直、戸惑った。なぜならば、先生は余り女性とは縁の無い男性と見られていたからである。しかし、申し出を受けそれでは何処で紹介してくれるのかという事に成った。居酒屋みたいなところをと云われたので、女性を紹介するのに居酒屋は無い。銀座の交通会館ラウンジでどうだとお話ししたら、渋々承諾された事を思い出す。奥様も若かったし、未だ、芝浦工業大学の事務職として輝いて見えた。奥様に初めてお会いした時、下澤教授が真剣な眼差しで緊張されていたことが懐かしい。

1972年に先生が船橋の地に住まわれたとき私も誘われ、当時かなりの過疎地であった現在の地に6ヶ月後れで私も転居することになった。それ以来、住居も数軒先の至近距離に住むことになった。企業経営に専念していた私にとっては学問の世界に戻るなど、当時は考えてもいなかった。非常勤講師で充分で有ったが、下澤先生に専任として奉職することを勧められた。何度か迷った末、先生が私の将来を考えて、再三に渡り説得くだされ、私は本学に勤務することを決心した。千葉商科大学専任教員に採用が決まった時、我が愚妻が下澤教授に「有難う御座いました、これで私

も安心して暮らして行ける」と言ったそうである。

下澤教授の研究・教育への熱心な取り組みと、優れた人格・博識は本学の発展に寄与するところ大で有ったと言えよう。約10年間に渡る闘病生活は先生のご家族にとって大変な日々で有った。特に奥様は当初、誰にも話せない病の事を私に話され、私も口を閉ざした。先生は病苦を物ともせず学生のために空手部の部長をされ、学問を最後まで全うされた。私は先輩、恩師、友人で有った先生から極めて多くのことを学ばせていただいた。ここに下澤教授のご功績を讃え、心中より感謝の言葉を捧げ記憶にとどめたい。